

## BOOK REVIEW

日本《島旅》紀行

齋藤 潤 著 光文社新書

十八年ほど前に、福岡県の宗像（むなかた）大島に行ったことがある。大学の卒業旅行という位置づけで、同級生がみな海外旅行へでかける中、ひとりで九州の海岸をあるきまわった。大分県の三光村（現・中津市）に父の実家があり、毎年のように遊びにいていたので、そのついでというのもあった。なぜ宗像だったのか、もう思い出せない。当時としてもたいした理由はなかったと思う。あてのないブラブラ旅行だった。

ただ宗像神社という海の神には関心があった。この神社は九州本土である福岡県宗像郡（現・宗像市）に辺津宮である宗像神社があり、そこから数キロ先の海上に浮かぶ大島に中津宮がある。そして中津宮はさらにその先の沖ノ島に祀られているのだ。沖ノ島は古代祭祀の遺跡が発掘されて注目を集めており、海の正倉院とも呼ばれる聖なる島だ。「太古の海のロマン」のようなものに魅かれた。当然沖ノ島にいきかかったのだが、この島は定住者がおらず、年に一回の大祭の日に関係者が渡島するだけなので、渡れない。では大島の中津宮へいってみるか、ということになった。

大島へは対岸の神湊（こうのみなと）から日に数本の定期船がでていいる。フェリー発船場とあるからどんな船かと思ったら、載せられる車は一台だけ、ちょっと大きめの漁船という感じだった。乗船時間は数十分。だが玄界灘のただなかへ乗り出していくわけだから平穩ではない。甲板で島影を眺めていたら、潮の目に入ったとたん、海面めがけてまっさかさまに振り落とされそうになった。ような気がした。それまで船といえば瀬戸内海や、松島の遊覧船くらいしか乗ったことがない。船が沈むのではないかとドキドキしながら島の港についた。

中津宮は港のすぐ近くだ。参ってしまうと、もうやることがない。島内をブラブラしてみることにした。港の近くには集落があり、商店もいくつかある。郵便局や、役場のような建物、民宿もある。さらに歩くと家並みはすぐにとぎれ、小道が畑の中を続いている。周囲の農家は民宿を兼ねているようで、看板がでている。しかしどうも営業しているようには見えない。他に人のひとりもない。島の地図ももっていないので、不安になる。

先に宿を決めようと思い、さっきの集落に戻って、民宿の呼び鈴を押してみる。

しばらくたって対応にでてきた奥さんに、今日泊めていただきたいのですが、というと怪訝そうな顔で、「ひとりですか？」と聞く。「ええ」とあいまいに答えると、しばらく迷っている。「夕飯は？」「食べたいんですが」「何もないですけどいいですか？」「ええ」。ようやく宿賃が提示され、それに頷くと、ではどうぞ、と通された。

昼間なのに、何もすることがない。仕方がないので、家や友人に手紙を書いた。いま自分がどこにいて何をしているのか。書きながら考えているうちに、なんとなくさっきの奥さんの表情の訳がのみこめてきた。いまは二月、一般市民が観光旅行にくる季節ではない。見た目ですごく学生だということがわかったとしても、こんな島にひとりでやってくる物好きはいない。数日前の新聞で、九州のどこかだったか、山中の僻村へでかけ、その旅先で自殺をはかった学生の記事を読んだ記憶がある。もしかしたら自分は自殺志願の学生に間違われたのかもしれない、と思った。

宿には他に釣り人らしい数人のグループが泊まりあわせている。しばらくすると彼らの宴会が始まった。手紙を三通ほども書き、本を読んだりしていると、ようやく夕食の時間になった。

だが「何もない」といわれた夕食は圧巻だった。こたつの上に並べきれないほどの海の幸がならんで、一人分なのだ。刺身から煮物、吸い物まで、フルコース。食べ切れなかった。

これを「何もない」というなら、何かがある時はどうなるのだろうか？

夜はまた何もすることがない。釣り人も宴会も終わって、静かそのものだ。ひたすら本を読み、九時過ぎには寝てしまった。

翌朝は宿の人に地図をもらい、島内探検にでかける。といっても、それこそ何があるわけでもない。日本海側の海を見たいと思って、牧場になっている西まわりの道を歩いてみた。牧草地はずっと続いているが、牛の姿はほとんど見えない。もちろん人はいない。他はもこもこと繁る亜熱帯の森ばかり。しばらくして海が見えてくる。そのむこうに大きな島影も見える。おそらく壱岐か対馬だろう。なんとも大きい。いま自分がいる「大島」と較べると大陸のようだ。島伝いにいけば、本当の大陸、朝鮮半島はもうすぐなのだろう。沖ノ島は累々たる波濤にまぎれていっこうにその所在を頭かにしない。海は風いでいて、白波もあまり見えない。

吸いこまれそうな青の淡彩を眺めていたら、さびしくなってきた。この道をこのままいけば島内を一周できるが、ここで引き返すことにする。

帰りの船は、昨日と同じように揺れたが、島から本土に渡る、という安心感からなのか、あまり沈む気配を感じなかった。もちろん、地元の人から見れば、昨日も今日も同じ、静かな海だっただろう。

『日本《島旅》紀行』を読んで久しぶりにこの旅を思い出した。

月並みな表現だが、宗像大島への旅で、自分の小ささに驚き、島人の目に自分がどう映るのかを通して、自分の姿や行動への反省にもなった。旅はさらに続いたが、この「島」行きがなければ、自分の旅の歴史の中でももっと平凡な旅に終わっていただろう。

この本は、訪れた島々の人や生活との出会いを通じて、様々な驚きを提供してくれる。なんといっても、30年にもわたる旅の記録の中から、よりすぐった島々のエピソード集なのだ。この本にかかっている島の現実のひとつひとつは、30年のあいだにかわってしまっているかもしれない。しかし、この30年という時の厚みがかえって、生きて動いている島の姿を浮き彫りにしてくれる。

著者はむろん執筆を生業とするれっきとしたプロだが、この本の中では、なぜ、いまこの島へきたのか、ということについて明確な答えは語られない。もちろん、そんなものは初めからないのだろう。作者のもつ、いわば漂白の匂いのようなものと、島の現実がぶつかりあったところに、この本のリアリティが感じられる。島々はけっして辺境ではない。各々が中心となったひとつの世界であり、そこから本土を眺める視線は、海を隔ての空間ととらえる思考とぶつかって、私たちの常識を攪乱してくれる。

なによりも島が楽しいのは、思い込みを覆し新鮮な驚きと楽しみを与えてくれること。島という場に身を置くことによって、自分の頭の中で常識がゲシュタルト崩壊（愉快なほどバラバラと崩れ去る）してゆくさまは、己の正義だけを信じる心貧しきヒーローが跋扈するハリウッド映画と比べ物にならないくらい面白い。

この著者の言が、そのままこの本の最良の批評になっているのは、いうまでもない。